令和八年夏号（2026年）

あたらしい道



第547号

【童心】

やっぱり　この道は
〝平凡な人〟　で　〝有難い人〟
それを　いいお方だと　いうんです

この道は

〝童心〟を呼び起こすんですよ

松木章垣女史
語録より

あたらしい道

令和八年　夏　547号

目次

テーマ「童心」

ことのは　童心と神はかり……1

「ご垂示」……4

日本の国柄　「華道」と日本文化――編集部……12

道友録　しこりの確証――山本利一……23





おもい

下座奉仕を終えて——大阪　佐藤吉信……35

うた

——兵庫　畑尾万里子……41

この道とおる

カオス理論——東京　佐瀬康志……44

編集後記……49

（表紙題字　松木草垣女史御親筆　とびら書　松下賀奈子さん）

新企画のお知らせ……

《日めくりに寄せて》——『やまとの言葉』か『松籟』から一つを選んで、ご自分の通り越しをお書き下さい（四百字原稿用紙5枚）。郵送にてあなたに執筆依頼状が届きます。ご協力のほど、よろしくお願い致します。



げんじぼたる

ことのは

「童心」と神はかり

この道は
童心を　呼び起こすんですよ

そうしないと　どうしても
ぶっちゃう（偉そうぶる）ようになって
一寸　残念ですからね

やっぱり　この道は
〝平凡な人〟で　〝有難い人〟
それを　いいお方だと　いうんです
偉い人じゃないんです

自分が　偉いと思って
「俺が」を　担っていらっしゃる方は
童心が　うつ伏せに　なっています

そうすると　惜しゅうございます

童心を　引き出すんですよ
そうしたらね　皆さんと　手を取り合って
そして　優しい　有難い人になるんですよ

でも　なにかの時に　ぴゅーと刺す
「おお恐い」ってね
でも　また日によっては
「優しい方」って　そういう風に　なるんですね

それが　有難い　お方なんですからね
威張っちゃいけませんよ

童心にかえると
自分の根（みたまさん）が
どん〳〵　太っていきますからね

それが　この道の
〝徳〟でございます

そうして　天の分かれであります
みたまそのものが　能き出す
それを　〝神はかり〟と申します

みんな　一人々々が　そうなってこそ
有難い　日本なんですからね

それによって　日本は
元の国に　なるんでございます

（『煌々』より）

「ご垂示」

面白い事を云って童心になる

みたまさんの喜び――
さあ　それでは皆さん
只今から　一言ですけれども

面白い事を云って　そして
つい　ご自分を　励ますんですよ

よろしいか　面白い事を云って
ご自分を励まして
つい　子供のような気持ちになる
童心になるんですね……

面白い事をおっしゃるんですよ　ね
そしてね　つい面白くなるんですね　よろしいか
そしてね　チョコ〳〵と　気がはずむんですね　ね

〝あら　子供みたいなこと　してるなあ〟
っていうような気持ちが　湧いて来てね
ワァーッと　自分で　笑いたくなるんですよって

それは　みたまさんの　喜びなんですからねって　ね
それなら　是が非でも　一遍やって　ご覧なさい

私の癖

たまにね　何かの時にね
シャッ〳〵とね　面白く
こういう風に〳〵　やらされちゃうんですよ
と　それね　面白い事　自分で　云っちゃうんです
そうすると　面白い所作になるんです
それがね　私の癖なんですよ……

誰か見てたら　おかしいなあと　思うでしょうけど
〝かまへんわ　まァ　別にどうもないんだから〟
と　自分でね　後で思うんですけどね

その時には　夢中でやってますのでね
二言か三言か　ヒヨコ〳〵と
面白い事　云っちゃう……

口で云うだけでなく自分をでかす

やっぱりご自分
どうしても足らない面が
多々あるという事を
よくお知りになって
そして　ご自分を
チク〳〵と　突つくんですよって　ね
それでなかったら
お口だけでいくらおっしゃったって
それは駄目なんですね

（昭和五十一年一月七日抜粋）

お口では云えるけれど　でしょうけれどもね
ご自分がやっぱり　でかさなかったら
それは駄目ですよって　分かりますね

毎日身の内にお礼やお詫びを

それにはね　毎日ね　身の内にです
お礼をおっしゃったり　お詫びをおっしゃったり
そういう風にね　これから皆さんね
何かにつけて　なさるでしょうねって　分かりましたか

純な気持ちになれば天から抱いてくれる

……本当に純になるんですよって
分かりますか

〝この歳になって純になれ　なんてとんでもない　馬鹿げている〟
って云われた方が　ありましたけどね
でもそれはね　分かりますでしょう

皆さんね　ご自分の気持ち　純になるんですよって
そうしたらね　本当にもう一切合財ね
もう　全部天上から　見られ通しですからね
〝よし〳〵〳〵〳〵〳〵〟　って
もう皆さん方を
抱いて下さいますよって

それがね　この道のね　いずれなんです
いずれ　そうなるんです　そうなんです

童子の気持ちにかえれ

それでね　道を戴いて　道を抱くんですね
そうしたら　皆さん　天上からね
〝いい子だ〳〵〟って云ってね
それで　抱いて下さるんですよって　云うんですね……

要するに　〝童子にかえれ〟
と　こういう訳なんです
気持ちはね　分かりましたか
どうぞお願い致しますよ

（昭和五十四年七月五日抜粋）

決めを作って実行したら童心に

今晩　何かね
〝どうしようか　よーし　こうしよう〟　って云って
「決め」をお作りになって下さいませよって

それを実行するんですよって　ね……
そうするとですね　皆さん
本当に　ご自分が　変わりますのよね

もう　本当に　童心になるんですからね
変わっちゃうんですよ

（昭和五十五年三月四日抜粋）

日本の国柄

「華道」と日本文化

編集部

【華道の本質】

華道（かどう）は、単なる「花を美しく生ける技術」ではなく、自然と人間の心を結び、生命の尊さを表現する日本独自の精神文化です。

＊自然への畏敬と対話

華道は、花を「材料」として扱うのではなく、生きものとして尊び、その命を生かす芸道です。

一本の枝、一輪の花にも天地の理（ことわり）を見いだし、自然の姿を凝縮して表現します。

日本文化に共通する「無常観（移ろいの美）」「余白の美」「不完全の中の調和」が華道にも色濃く表れています。

＊「型」の中に宿る精神

華道には厳格な「型」があります。しかし、その型は束縛ではなく、自然の秩序を体得するための道です。

修練を重ねることで、心が整い、花と向き

合う姿勢そのものが修養となります。茶道・書道・武道と同じく、華道もまた「道」であり、技術を通して人格を磨く修行の道です。

＊天・地・人の思想

多くの流派で「天・地・人」の三才を基本構成とします。

これは宇宙観を象徴し、天＝宇宙・精神、「地＝大地・現実」、「人＝その間に生きる存在」を意味します。華道は、この三者の調和を花で表現する芸術です。

【華道の歴史】

＊起源（仏前供花）

6世紀に仏教が伝来すると、仏前に花を供える風習が生まれました。これが華道の源流です。当初は宗教的行為でしたが、やがて様式が整えられていきます。

＊室町時代――立花（りっか）の成立

15世紀、京都・六角堂の僧侶「池坊専慶（いけのぼうせんけい）」により「立花（りっか）」が確立されました。これが華道成立の大きな転機です。立花は壮大な自然景観を象徴的に表現する形式で、武家社会の精神性とも結びつきました。

＊江戸時代――生花（しょうか）と普及

江戸時代には、より簡素で洗練された「生花（しょうか）」が生まれ、町人層にも広がりました。

華道は武士や公家だけでなく、庶民の教養として定着します。多くの流派（池坊・未生流・遠州流など）が成立しました。

＊近代以降――自由花の登場

明治以降、西洋文化の影響を受け、「自由花」や「盛花」が生まれます。小原流や草月流などが登場し、前衛的・造形的な表現も発展しました。

現代では海外にも広がり、日本文化を象徴する芸術として評価されています。

【生け花と華道の違い】

「生け花」と「華道」は、しばしば同じ意味で使われますが、厳密にはニュアンスと位置づけが異なります。

簡潔に言えば、生け花＝技法・作品そのもの、華道＝精神性を含む〝道〟としての体系です。

一．生け花とは

＊花を生ける行為・作品

生け花は、花や枝を器に生けて美しく構成すること、またはその作品を指します。

日常的な装花や趣味としての花のアレンジも広く含まれます。

＊技術・造形中心

構図、色彩、バランス、空間の取り方など、美的完成度が重視されます。現代ではフラワーアレンジメントも広義では「生け花」に含まれる場合があります。

二、華道とは

＊「道」としての修養

華道は、花を生ける技術だけでなく、精神修養を目的とする芸道です。茶道・書道・武道と同じく、「型」を通して心を磨く世界です。

＊伝統・流派・思想を持つ

池坊、小原流、草月流など、それぞれに歴史と哲学があり、「天・地・人」などの宇宙観を基礎とします。

＊自然観・人生観を含む

華道では、自然への畏敬、無常観、調和の思想が重んじられます。

単なる装飾ではなく、自然と人間の在り方を問う文化行為です。

三、違いをまとめると

観点	生け花	華道
意味	花を生ける 行為・作品	花を通じて 心を磨く「道」
重視点	技術・造形美	精神性・修養
範囲	比較的広い	伝統体系に基づく

＊＊＊＊＊

つまり、生け花は「華道の実践」です。

華道という精神的枠組みの中で行われる具体的表現が「生け花」とも言えます。

花を美しく生けるだけなら「生け花」。

花を通して自己を整え、自然と向き合うなら「華道」。

両者は対立するものではなく、技と心の関係のように、表と裏の関係にあります。

日本文化の奥行きは、この「道」という考え方にこそ表れているのです。

【代表的な流派】

一、**池坊**（いけのぼう）

■最古の流派

室町時代、京都・六角堂の僧侶 池坊専慶 に始まります。華道の源流とされる最も歴史ある流派です。

■特徴

・立花……壮大な自然観を表現する伝統様式

・生花……簡潔で格調高い三才構成（天・地・人）

・自由花も展開……伝統を重んじつつも、現代的表現にも取り組んでいます。

■本質

「いのちの尊重」と「自然の理（ことわり）」を重視。格式と精神性の高さが特徴です。

二、**小原流**（おはらりゅう）

■近代華道の先駆け

明治時代、小原雲心により創始。

■特徴

・盛花（もりばな）の創始

・水盤を用いた広がりのある構成

・写景的表現（自然風景を写す）

西洋花材を取り入れ、日本の生活空間に合う近代的様式を確立しました。

■本質

自然を写し取り、生活空間に調和させる柔軟さ。

三、**草月流**（そうげつりゅう）

■前衛的・自由な流派

一九二七年、勅使河原蒼風により創始。

■特徴

・「花はいける人の心を映す」
・型にとらわれない自由表現
・金属・ガラスなど異素材も使用
世界的にも評価が高く、現代美術との接点も多い流派です。

■本質
個性と創造性を尊重する革新性。

四、未生流（みしょうりゅう）

■江戸時代中期に成立
自然の姿を理論的に表現することを重視。

■特徴
・理論体系が明確
・自然の摂理を表す構成
・端正で知的な印象

五、古流（こりゅう）諸派

江戸時代以前の伝統様式を継承する流派の総称。
立花を中心に、格式を重んじます。

六、その他の流派

・遠州流（茶道との関係が深い）
・嵯峨御流（大覚寺を本拠とする）
・龍生派
・松月堂古流　など
現在、日本国内だけでも数百の流派が存在するといわれます。

流派の違いの本質

流派の違いは単なる形の違いではありません。自然観、宇宙観、人生観、美意識の違いが表れています。

しかし、共通しているのは、花を通して心を整え、自然と調和する、という日本文化の根幹です。

＊＊＊＊＊＊＊

池坊の伝統、小原流の近代性、草月流の革新性。

それぞれが時代の精神を映しながら発展してきました。

華道の多様な流派は、日本文化の豊かさそのものを物語っています。

【日本文化としての華道】

日本文化としての華道は、単なる造形芸術ではなく、自然観・宗教観・美意識・倫理観が結晶した総合的精神文化です。

花を生けるという静かな行為の中に、日本人が長い歴史の中で育んできた価値観が凝縮されています。

一、自然と共に生きる思想

日本文化の根底には「自然と対立するのではなく共に生きる」という姿勢があります。華道もまた、花を支配するのではなく、花の命を生かすことを目的とします。

・枯れゆく姿を否定しない
・季節を尊ぶ
・余白を大切にする

これは冒頭でも述べたように、「もののあわれ」や「無常観」と深く結びついています。満開よりも、つぼみや散り際に美を見いだす感性は、日本独自の美意識です。

二、「道」の文化

ここも繰り返しになりますが、華道は「花道」とも書かれ、茶道・書道・武道と同じく「道」の文化に属します。

ここでいう「道」とは、技術の習得、精神の修養、人格の陶冶を意味します。型を学ぶことは形式主義ではなく、自然の秩序を体得する過程です。

静かに花と向き合う時間は、自己を整える時間でもあります。

三、天・地・人の宇宙観

多くの流派で重んじられる「天・地・人」の三才構成は、日本的宇宙観を象徴します。

・天（精神・理想）
・地（自然・現実）
・人（その間に立つ存在）

華道は、この三者の調和を一本の枝、一輪の花で表現します。

そこには、自然と人間の共存という思想が息づいています。

四、空間の美と余白

華道は「足し算の美」ではなく「引き算の美」です。すべてを埋め尽くさない。空間を残すことで、花が生きる。この余白の思想は、庭園、茶室、水墨画、和歌など、日本文化全体に通じる美意識です。

五、生活文化としての華道

華道は宮廷や武家の文化から始まり、やがて町人文化へと広がりました。今日では家庭や学校教育にも取り入れられています。

それは特権的芸術ではなく、生活の中で心

を整える文化として受け継がれてきたからです。

六、日本文化としての意義

華道は、派手さよりも静けさを、永遠よりも瞬間を尊びます。

花は必ず枯れます。

しかし、その「はかなさ」こそが命の輝きを際立たせます。

この感性は、日本人が自然災害や四季の移ろいと共に生きてきた歴史の中で培われました。

＊＊＊＊＊＊＊＊

華道とは、自然の命を借りて、人の心と宇宙の調和を表す日本の芸道です。それは豪壮さを競う文化ではなく、静かに、深く、内面を磨く文化です。

華道の一輪の花の中には、日本人が大切にしてきた「和」「敬」「清」「寂」に通じる精神が息づいています。

あたらしい道では、自然の理を尊び、自然から悟り取るという教えがあります。華道の精神にはその教えと通じるものがあります。

花を生けるとき、人は花を支配するのではなく、花の姿をよく見て、花が最も美しく生きる形を探します。人間中心の考えではなく、自然に寄り添う心です。

日本古来の教え「あたらしい道」は、成ってきたことから自身を深く見つめる、自然に自ら寄り添う生き方が根底にあります。華道の世界とも深く通じています。

【結び】

★花は語らずして教える

花は言葉を持ちません。

しかし、花には多くの教えがあります。

時旬（ときしゅん）に咲き、やがて散る。

その姿は、命の美しさと儚（はかな）さを教えてくれます。華道を学ぶ人は、花を通して謙虚さ、静けさ、自然への感謝を学びます。

花は語らずして、人の心を育てるのです。

★現代人にとっての華道の意味

現代社会は、忙しく、自然から遠ざかりがちな生活になっています。その中で華道は、人の心を自然に戻してくれる文化です。

花を生ける時間は、心を静かに整える時間でもあります。

そして、自然の美しさを感じ、天地の働きに思いを巡らすことは、人間の本来の姿を取り戻すことにつながります。

★心を整える

花を生けるとは、心を整えることです。

華道とは、花を飾る技術ではなく、花を通して心を整える道です。花の姿をよく見つめ、自然の調和を感じ、静かに花を生ける。

そのひとときの中で、人は自分自身を見つめることができます。

花は、自然の声を伝えてくれる存在です。

華道とは、その声に耳を傾ける、日本人の美しい文化なのです。

〈参考文献〉　生成ＡＩ「シンリくん」



岐阜県「郡上八幡の街並み」

道友録

しこりの確証

――「にっぽん！　にっぽん！」が始まった経緯――

山本利一

私は明治四十一年生まれ、数え年八十六歳になりました。〝明治は遠くなりにけり〟という言葉が流行したのは、何時のころだったでしょうか。今では、その言葉も忘れられて、私達、明治人間もめっきり少なくなりました。

そんな中で、私はどこといって身体に不自由なところはありません。また、あたらしい道のお行という目標を与えられて、毎日々々気を張っていられることも、本当に喜ばせてもらっています。

家内も八十歳で達者でおります。子供は、長女が嫁いで京都に居り、長男は警察官で、あたらしい道の場と道路一つ向いに世帯を持っております。次男は私の家の近所に住んで、大阪市役所に勤めております。私は一カ月に十回ぐらいの日程で、枚方市の自宅を出て場に帰参し、お行の後は、長男の家に一泊して帰るというコースで、こんなに恵まれていいのかと、いつも感謝しております。

私は淡路島の洲本市の郊外に、農家の三男として生まれました。平凡で、おとなしい子供だったということですが、旧制中学校を卒

業する頃になって、急に身体が悪くなりました。疲れやすく、寝汗が出て、とうく寝込んでしまうことになりました。医者の診断は心臓が弱っていて、肋膜も少々悪いということでした。

ところが、ある日、寝ておりまして、隣の部屋で父と母が話しているのを聞いてしまったんです。「うちは、人さんには何時もよくしているのに、利一は、なんであんな業病になってしもたんやろ」と、母が嘆き父が慰めるように何か言ってました。

（あっ、僕は肺病になってしまったんだ）と、全身が凍りつくようなショックを感じました。当時、肺病は死に病いと言われ、他人に伝染するので、家族からも嫌われたものでした。そんな人をたくさん見ておりました。

立ち直る道は信仰しかないと言われていて、自分自身も（しゃにむに、強いものが持ちたい）と思いましたが、そのほうの知識はまるでありません。毎日々々、新聞を熱心に読んでいましたが、ある日、一枚のチラシが入っていました。

〃催眠術で、健康になろう〃と書いてあります。日本髪を結った女の先生の写真があり、山口という名前が載っていました。父に言うと、「いいだろう」となって、翌日、洲本の街に出ました。

洲本の街は、碁盤目のように作られています。すぐに分かるだろうと思ったのに、歩けどくく見当たらないのです。父も一緒だったのにと思うと、今でも不思議でなりません。とうく街はずれへ出てしまいました。そして、ようやく山口という表札を見つけたのです。たゞ、格子戸の上に〆縄が張ってあって、

（あれ？）と思いました。

案内を乞うと、中年の女性が出てきました。日本髪の格好も面長の顔も、チラシと同じだったので、やれ〳〵と思って、いきなり「病気を治してもらいに来ました」と言いました。

「まあ〳〵、とにかく、お上がり下さい」と、通してもらったところに、神さんがおごそかに祭ってあるんです。初めて、間違って入ったことに気がつきました。大道教洲本集談所というところで、それが、私の四十五年間にわたる信仰の出発点でした。

先生は大阪の親教会に行っておられるということで、その日本髪の奥さんが話しをして下さいました。あとから分かったことですが、大道教は天理教の分かれで、中山みき教祖の叔父に当たる人が開教したものといわれています。ご祭神として、造化三神を天津大神と総称して祭っていました。

その日、奥さんから、「欲しい、惜しい、可愛いい、憎い、怨み、腹立ち、慾、高慢という悪い心が、病気になるのですよ」と、〃八つの埃（ほこり）〃を聞かされて、（成程なあ）と思いましたが、翌日お会いした先生の人格には、強い感銘を受けました。十九歳から二十八歳までの洲本在住中は、先生の薫陶を受けて、大道教を熱心に信仰しました。

ある日、私に話しをして下さっていた先生が、急に「あっ、あぶない！」と声をあげられたんです。しばらくして、信者のおばあさんが入ってきましたが、先生が、「大事なかったか？」と、声をかけられる。「実はねえ、ゲタの鼻緒が切れて転びましたんや。通りがかりの娘さんが親切にしてくれました」と、おば

あさんが言って、私は合点がいきました。そんな神秘な方でもありました。

大道教には、唱えごとを言って、患部に布をかけ、息を吹き込むという病気治しの法があります。それをやってもらっているうちに、私の肺病はめきくとよくなったんです。奥さんも肺病がもとで信心するようになり、治ったあげくに嫁に貰ってもらったということでした。ご夫婦に可愛いがっていただき、身体が治った嬉しさで、私は教導職の資格をいただき、あっちこっちと、病気治しのお助けに専念いたしました。

＊　＊　＊

二十四歳の時、従兄の世話があって、洲本町役場に勤めました。昼間は職場で、夜は教会やお助けに回って、人とのふれ合いが楽しくて、三、四年はあっという間に経ちました。その頃、上司が言ってくれたんです。

「これからは、役人も専門職が要求される時代になる。大阪の技術部門へ行く気はないか。いい先生を紹介するよ」。それが、曽我先生だというので、「その方なら願うところです。ぜひ」と、お願いしました。

曽我先生は、上水道界では、日本の権威者でしたが、洲本町の水道を建設されたことから、私はなんとなく（補修にでも役立てればいい）と思って、何度か、先生から手ほどきを受けていました。

先生は、すぐに引き受けて下さって、私は大阪府枚方町の役場に移ることになりました。水道課勤務で、曽我先生のお口添えがあると、いっぱつ採用でした。

また、私の素人くさい勉強が、案外、役に立つこともあったのです。

先生の家に、事務所の仲間が五、六人居て、その中へ入れてもらいました。仲間と言えるかどうか？　私は役場勤めですから、日曜日ぐらいしか事務所のことが出来ません。そんな私を、夜は、工科学校へも通わしてくれました。恐縮する私に、「まあ、居れよ」と、先生は、そんな大らかなお人柄でした。

ところが、私の身体が、また不調になりました。（再発か？）と、ぞっとしました。先生の家を出て、下宿屋に入ろう。工科学校も退めて、役場勤め一本にしようと思いました。ご諒解を求めると、先生は、「これで、勉強したらええ」と、水道工学の本を下さって、「分からん時は、聞きにくるんやで」と言われたんです。私の胸の中は、次から次と、熱いものがこみ上げてきて、頭を、何遍もくくり下げてごまかしました。

幸いに、肺結核の症状はおさまりましたが、その頃から、腰に激痛が走ると、立っていられなくなりました。整形外科なんかなかった時代ですから、これといった治療方法がありません。鍼・灸が一般的で、研究的に電気療法機を具えつけた医院があった程度です。三十二歳で、郷里から、今の家内を迎えましたが、いきなり、やいとの練習をさせられて、新婚の夢も消しとんだことと思います。

ところが、この時も、私はある指圧の先生にご縁をもつことができたのです。そこでは、厳重な会員制がとられていて、各界の名士ばかりが治療を受けるわけですから、私の立場で行けるところではありません。

それを「欠員が一人できるらしい」と、そっ

と紹介してくれた方がありました。新聞社の偉い人でしたが、ご近所に住んでいるというだけの間柄でした。

費用も大変でしたが、私は六年間、休まずに通いました。事実、月一回、二時間の施術で、どうやらこうやら、役所に勤めることはできたのです。しかし、皆さんはどんく入れ替っていくのに、私のは完治しませんでした。

「おかしいなあ。腹の中のしこりが、どうしても取れんなあ」と、先生がひとり言を言うのを、しばし耳にしました。名人先生さえうろたえさした、頑固なしこりが、やがて、おやかた様のお言葉によって、消えてなくなることになるのです。

一方、私が赴任した昭和十年、一万五千人だった枚方町は、枚方市になり、現在、四十万人の都市になりました。その間、平穏な日ばかりではなかったはずですが、皆様のおかげで大過なく勤めることが出来て、私は、水道部長を最後に、昭和四十年、五十八歳で勇退しました。すぐに、市会議長から声をかけられ、枚方駅前デパートの支配人の職が与えられ、ここでも、十五年間勤めることが出来たのです。

＊　＊　＊

おやかた様にお会いできたのは、昭和四十六年十二月十七日でございます。長男が、先輩警察官のお勧めで御明断を戴き、『お父さんを連れていらっしゃい』とおっしゃったということでした。ここでも絶妙な天の采配があったのではないかと思うと、今思い出して

も有難さで胸がいっぱいになります。

私自身にお話しがあったとしても、こう素直には腰が上げられなかったと思います。

大道教には、春秋の大祭にしか行かなくなってましたが、やはり、背信のこだわりはございました。息子可愛いさで来たものの、（バチが当たるのではないか？）という思いは拭えませんでした。

ところが、おやかた様の前に坐ったとたん、そんな下世話な心配はすーっと吸いこまれてしまって、あとかたもなくなりました。（これは、ケタが違うな。天と地ほどの差だ）と思いました。

『あなたさんは、今までに、どちらのご信仰を？』と、初っぱなにお尋ねになりました。大道教のことを言いますと、『この道はね、神さんをどうのこうのと申しませんが、あなたが何かやっているなと、分かるんです』。

『それにはわけがある。あなたのみたまさんに、しこりがあるのですよ。あなたは、陽気で陽気でたまらないはずなんですが、しこりのおかげで、陽気じゃありませんね。これ、ちょっと惜しゅうございます』

『天理教は表でね、裏があるんですね。それがこの道なんです。天理教は過去に、表を全部さらけて、お教えとして世の中に出したんですよ。大したものなんですよ。それなのに、なんだかんだと、神様ごとに利用されている方が、あっちこっちにある』

『裏返しの（この道）が、これからの世に、まさに、天道を吹いて吹いて、吹きまくるのですよ。そういう時代でございます』

『あなたのみたまさんが、ぱっと気がついていらっしゃいますが、ここ（腹）にしこりが

あるから、どうしょうもございません。この道を極めて下さいね。極めるんですよ。……あなたの本領は、これからじゃございませんかと申します』

以上が、御明断の大略でございます。早速、大道教を辞める手続きを終えて、十二月二十二日に、この道につながらさせていただきました。そして、年が明けた二月九日に、第一回目のお仕込みを頂戴しました。

『あたらしい道は根の理です　根を洗うところ　根はなあ　目には見えない……目に見えるところは　誰でも分かっている　見えないところが　なんとまあ　世の未じゃ……今の世の中は　うそのうそじゃ　この道はなあ　さあ〳〵本当の理じゃ

お前さん　身の内のほうに　しこりがあるんえ　こり〳〵　しこりじゃぜ　そのしこりがな　もうこれで　ほどけちゃった

おい〳〵　どう〳〵〳〵〳〵

とろ〳〵〳〵〳〵　とろけちゃった　今はなあ　まあ〳〵　驚いているんえ　こういう道です……』

この道につながってまで、おかげ話しをするのは恐縮ですが、このお仕込みを頂戴した直後から、私の腰痛が、うそのように治ってしまったのです。今までついてまわっていた苦痛がなくなって、私の気分は、どんく晴やかになってまいりました。

実際、私の身辺で、思い残すことはありません。（これからは、この道に、尽し果たしをさせてもらうだけだ）と思いました。

＊　＊　＊

昭和五十八年十二月二十七日、その年の最終のお仕込みで、このように頂戴しました。

『今から　あなたさんに　お頼みがあります
それは　多少は　ご自分としては　ご迷惑でしょうが　でも　それは　天上からの　どうしようもない……
あなたさんへの　本当の本当を　こらやいく　不（嫌）と思わないで　この道を戴いて　毎晩々々　さあく　く　く　日本々々で　この場で　ご自分のお口から　これだけを　繰り返しく　申して下さいな
さあ　これからです　さあ　お前さん　有難い自分に　これだけのことを　毎晩々々十遍づつ　皆さんの前で　堂々と　繰り返すんです』

それからは、『皆さん方……』となって、お示しが続きました。はじめのほうを抜萃いたします。

『あたらしい道というところは　これからの時代　どんく　く　く　お肚（なか）のほうから絶対々々　如何にもく　誠の誠が　湧き出るんだから　この道のことを　本気の本気で　絶対々々　かまわんく　気にしないで
浮世に向けて　大きな声で　あちらこちらに　必ずく　毎晩々々　お前さん達が　日にちを決めて　聞いてもらうのが　本当
さあ　これだけを　お前さん達　ご縁のお方が　そこら中に　同じことを　十遍づつ繰り返して　言って下さるんです　それをしないと　あたらしい道の　一切合財が　中途半端になります
そこでく　皆さん方　これからく　この道の理を　あっちへ行って　こっちへ行って　同じことばっかしを　十遍づつ　繰り返

し　それを言うのが　嫌だく　嫌でたまらない　そういう風に　思うだろう　その思い方は　馬鹿げています』

そして、最後には、次のようにむすんで戴きました。

『それでは　十遍づつ　繰り返す　ね　それを実行して下さいますね　大丈夫ですね　それが　あなたのお役なんです　分かりましたね　これで　安心しました　天上は　お前さんの性質を　見てしまっているから　こういう風に　決めたらしい　分かりましたね　お願いいたします』

すぐさま、関係者の間でねり合いが始まりました。

その結果、松の間のお行の時に、私が「にっぽん！」と言ったあと、皆さんが「にっぽん！」と唱和する。

それを十遍繰り返すという形式が調いました。翌五十九年の初場から始めることも決定しました。

『毎晩々々』とおっしゃっているのですから、私は休めなくなりました。「あなたが帰参した時の毎晩で、いいのではないか」という意見もありましたが、私は（ここは、甘えてはならない）と決心しました。喜びに喜んで、（今日もよかった。明日も喜んで戻らせていただこう）と思って、実行させていただきました。一方では、身辺上に不思議な出来ごとがあって、（これは何から何まで天の仕い回しに違いない）と思わされたからでした。

最初に申しましたように、長男は場の前に住んで居りますが、この家を手に入れたのが、私がこのお仕込みを戴いた年、昭和五十八年だったのです。何気なくやったことが、まる

でこのことの準備のようでした。

そして、どれだけ、私を勇気づけてくれたことか。枚方からだと、夜は交通機関がなくなって、場に泊まり込まなければなりません。

そのお行のほうが必要だったのかも分かりませんが、ともあれ、長男夫婦の協力があって、どうやら丸一年間、私は「にっぽん！にっぽん！」と、連呼しつづけることが出来ました。

六十年度からは、何人かが交替で務めることになって、六十三年の終場まで続けられました。おやかた様から、『今年の歳末で結構です』と、お示しがあったと聞いております。

そして、翌、昭和六十四年一月七日に、昭和天皇が崩御あそばしました。天の計画（はからい）を、私達が詮索しても分かろうはずがなく、話題にすることも意味のないことですが、私はこのようなことに遭遇するたびに、この道に感動しないではおれません。

おやかた様から頂戴するばかりで、何一つ、恩返しの出来ない私でありますが、もう一つ、通らせていただいたものに、保護司の務めがございます。私が福祉事務所長の時に、保護司会の手助けをさせてもらったのがご縁で、現役のまゝ、大阪保護観察所から保護司の委任を受けました。昭和三十六年から二十六年間、無事に務めることが出来まして、六十歳の定年で降ろさせていただいたのです。

保護司という仕事は、非行に走った少年が初犯の時は、ほとんど少年院へ送らずに、両親と保護司とで更生させるという制度です。この仕事では、あたらしい道で天のご存在を知ったことが、本当に有難かったと、目に見えて頂戴させていただきました。

非行少年ができる家庭は、おおむね、親子がいがみ合っております。親は「このガキが！」と怒鳴りつけ、子供は「このクソオヤジ！」と反抗しております。私は、子供には極力褒めることにして、「親にさからってはいかんよ」と言う程度でしたが、親御さんには、分かってもらうまで、天の理を申しあげ、実行してもらいました。

「親が自分の親を立てているか」という点では、ほとんどの親ごさんが落第でした。「そのご両親の思いの状態を、そのまゝ、子供さんから見せられているんです」と分かってもらって、自分の至らなかったことを、天に詫びてもらいました。

両親の思いが変わると、子供はみるく変わってまいります。こんな現実をまざくと見せられて、（理を立てるということは、大したことなのだ）と、確信しないではおれませんでした。

以上が、私の生きてきた、つたない道すがらでございます。ありのまゝに申しあげたことが、自慢話になったところがありましたら、どうぞお許し下さい。私が何時も思いますのは、みたまさんの前生、ご先祖さんのお導きによって、この道にご縁をいただき、おやかた様によって、上々々の上因縁に切替えていただき、身の内を浄化育成していただき、まことに有難い極みでございます。この上は、この道くと、道になり切って、一切合財、天にお任せ、みたま任せに丸くなって情と誠をもって立ち上がる所存でございます。お互い同志、仲良く手を取り合って、喜び勇んで励ませていただきます。ありがとうございました。

（月刊誌211号から再録）

おもい

下座奉仕を終えて

大阪　佐藤吉信



一、下座に入るまで

〝世直り国替えのため　おやかたさまにご縁をいただいたのに　このままでいいのだろうか〟

そんな忸怩（じくじ）たる思いが、私の中で繰り返し出てきたのは、一昨年の十月頃のことでした。

勤務していた保険会社の人事異動があり、これまで本格的に道に向き合うことができた川崎での五年間の後に、大阪への異動が決まりました。

当初一年は「会社生活で初めて余裕を感じた部署」に配属されて、場に足繁く戻らせて頂くことができました。しかしその後、〝力を発揮して自らのサラリーマン生活を全うしたい〟という浮世的な気持ちが湧いて、私は敢えて部内異動を申し出たのです。

その後の職場では、今までに増して多忙な日が続き、地元の練り合いも出られず、最低週１回は松の間に出ることとしたものの、直前ギリギリになって場に戻る始末で、いよいよの時期、国替えにつながるお行ができているのかどうか、という葛藤に苛まれました。

そこでT先輩から紹介された地元M先輩に相談をし、

「紫の間で問え、そのかわり浮かばされた答えは必ず実行するように」

との、アドバイスをいただいて、それに従い浮かばされた「(退職し)下座奉仕すること」を素直に決心することができました。

下座に入るまでは直前ギリギリまで輪をかけた忙しい日々でしたが、何とかそれこそ滑り込みで下座奉仕をお許しいただけることになりました。

二、予兆と身上の試練

早速、下座奉仕が始まり、間もなくの四月四日、ある出来事が起こります。

長年愛用していた伊東屋のボールペンを、早朝の清掃中に紛失してしまったのです。それは単なる物の紛失ではなく、今から思えば過去の自分との決別を促す、予兆のようでもあったように思います。

翌五日、突如として激痛が襲いました。まるで失くしたボールペンの先で強く突かれたような、一点に集中する左脇腹の痛み。除草作業の最中、脂汗が止まらず、その場に崩れ落ちるほどの苦しみでした。

偶然、地元の練り合いに来られていたS先輩に診ていただき、場で横になって「思いを切り替える」ことで一度は回復の兆しを見せましたが、これは私の身の内を浚(さら)う始まりに過ぎませんでした。

四月十二日、耐え難い痛みが再来しました。激しい嘔吐と三十九度近い高熱に襲われ、意識朦朧とした中で病院に担ぎ込まれました。

診断は、「尿管結石に起因する腎盂腎炎」。

即座に入院措置が決まり、手術を受けることとなりました。

その後も、高熱が下がらず意識も虚ろな状態が三日ほど続き、そのとき、ちょうど和歌山県の現職知事が敗血症で死んだとのニュースがありました。

バイタル管理の個室病床で一人、

「これは思いの切り替えを求められているんだ。退職して下座に飛び込んだが、場合によってはこのまま闘病生活が続いてもいいんだ。ひたすら小さなことを喜んで通るしかない」

と、観念しながら自らに言い聞かせ続けました。

程なく熱は下がり始めて快方に向かい、一週間後には退院することになり、下座奉仕の継続をお許しいただくことができました。

三、炙り出される「己」

その後、身上の原因となった結石を除去すべく、二回目の入院手術も経て復帰した私を待ち受けていたのは、さらなる心の葛藤でした。

下座の共同生活の中で、周囲の言動所作、生活習慣の違いが、どうしても気にかかってしまうのでした。

本来であれば、共に歩むべき方々に対して自分の物差しで良し悪しを判断したり、心のどこかで場の年齢構成・将来像までも、否定的に捉えてしまう自分があったのです。

術後も取り切れない石が残り、万全な体調でないこともあって、柔軟にものごとを受け入れることができず、自分勝手な思いを抱えたまま奉仕を続けることになって、大きな行き詰まりを感じていました。

六月五日、その鬱屈した思いが限界に達しました。

新卒から三十五年間勤務した会社を退職し飛び込んで、そして、せっかく身上をいただきつつも、継続を許された下座を辞することを考え、松の間の最後列の下座奉仕者の列で待機をしておりました。

「下座を辞したら場にも居にくいな」

と、思ったその時のことです。

川崎時代にある事でお手を煩わせたS先輩から、冗談で一般道友の並ぶ列に「前へ、前へ」と促されました。

その瞬間、身を貫くような衝撃を受けました。さらに、その日のご垂示は「根を洗ってやった」といただいたのです。

「天・おやかたさまは、すべてをお見通しなんだ」

おやかたさまのぬくとい大愛の手が、そこにあることを悟りました。

私が周囲に対して抱いていた違和感や不満は、実は私自身の内にあるものでした。「自分はいつも正しい」という傲慢さ・甘えの裏返しであり、おやかた様が用意してくださった「炙り出し」の機会であったのです。

四、根の教えに立ち返る

続いて、六月十日の二班当番の方々との合同練り合いで、私はさらなる現実に直面し愕然としました。

私はかつて川崎で本格的におやかたさまに向き合い、神（他のものに頼る心）とは訣別したつもりでいました。

しかし、実際には、自分自身の根底に、まだ何かに依存しようとする弱さが残っている

ことに気がついたのです。

天、おやかたさまと介在するものなく真っ直ぐに繋がっているつもりでいながら、実際には分かったふりをしたまま、せっかく練り合いで貯めていただいた理気を損ない、マイナスにしてきた自分であったと気づかしてもらったのです。

今から、「一からやり直さなければならない」と痛感させられました。

その後のある朝のこと、同じ下座者のOさんから、夢の中で、昨年八月に他界されたK先輩が私に「強くなれ」と言っておられたというお話を聞きました。

早速、その言葉に応えたいと拝所で理立をさせていただき、場の玄関から出たときに、日本庭園へ向かう一匹の「主のような蛇」を見ました。

それは、執着を捨てて新しく生まれ変わり根の教えで行くんだぞ、ということを見せてもらったように思えました。

五、結び：千早城跡からの展望

下座奉仕を通して場においていただき、特に紫の間をいただきにいただく中で、おやかたさまに身の内を浚っていただきました。

その中で、自分の「因縁」が何なのか、だんだんはっきりしてきました。

おやかたさま、そして、先祖さん・みたまさんは、下座奉仕での身上や様々な事情を通じ、「喝」を入れていただきながら、私を本当の「道の者」にする、スタート地点につけていただいたものと思います。

下座後、ふと思わされて、楠公ゆかりの千

早城跡のある金剛山に登りました。

山頂近くの国見城跡から大阪平野を一望した時、私の中に改めて、おやかたさまの本願である「国を元に戻す」という強い思いが湧き上がってきました。

そして、自分勝手な思いを捨てて、おやかたさま式で素直に誠の誠で通っていこうと思わされました。

本当に、この下座奉仕ではおやかたさまから「救いの理」、「大愛」をいただいたと心から思っております。

これからは、思いを新たに喜びをもって、かつて平成元年十二月にご面接でいただいた、「今晩は　夜の夜中に　天上から　誠の誠で大事に大事に　仕上げるから　本当に根の教えで　頑張って下さいな　頼む頼む頼む　お頼みしますから　これが　本当でございました　どうぞ　お願いです」との、お言葉を実践していく歩みを続けてまいります。

また、下座奉仕中、その後も含め、お世話になったすべての方々に、心からの感謝を申し上げ、お応えできるようこれから励んでまいります。

本当にありがたい下座奉仕をいただき、ありがとうございました。



うた

兵庫　畑尾万里子



堀の上　戸も開けず指す　西の空

満月光る　子の笑顔

外出先からの帰り道、先に家に入ろうとした息子が、振り向いて、指す方向に、大きな銀色に光る満月がありました。

私は、美しい満月と、それを喜ぶ息子に、なにかしら、報われた気持ちになりました。

実は、この時、息子は休職中だったので、月を愛でる気持ちがあったことが、うれしかったのです。

自然のものは、その一瞬の美しさを、その時のその人に与えられるもので、ありがたいものだと思います。

尚、今は、なんとか就職できたようです。

娘来て　用をつくりて　送る身の

みやげに持たす　コロッケ四つ

滅多に会えない次女が、急に、帰省してくれました。
夫と三人で、ゆっくり、お茶をすすりました。
これも、私が背骨を一ヶ所、圧迫骨折してしまったおかげです。
様子を見に来たのだと思います。
もう三十八才になりますので、学生時代、文化祭の舞台の上で、マツケンサンバを歌って踊った人とは、とても思えません。
時計ばかり見て、幼稚園のお迎えのことが気になる人になっているなんて、ありがたいと思います。
近くの駅まで、二人でゆっくり歩きました。
「あ！　これ、おいしそう！」
「うん！」
「ごちそうするよ！」
「いいよ、いいよ！」

「大丈夫だよ！」
〃今晩、お宅は、コロッケ定食ですね！〃
〃また、帰っておいで！〃



この道とおる

カオス理論

東京　佐瀬康志



地下鉄駅で見つけた広報のビラのようなものを車中で読んで感心しました。理論物理学の先生が書いているエッセイについてのお話です。

――佐瀬さんの朝礼のお話（要約）――

数学が1＋2＝3とは限らない話

――自然現象は数学の理論通りに動いてはいない――

数学のお話です。数学というのは1＋2＝3というように、答えは決まっているものと思っていましたが、そうではないそうです。ドイツの現代数学の父ともいわれるダ

フィット・ヒルベルトによると、「数学は自然界の現象を論理的に正しく表現することを目的としたものではなく、矛盾を生じないことが保証されている仮定から、形式的に結論を導いていく抽象理論である」と言っています。

例えば、「全体は部分より大きい」という〝公理〟を考えたとき、この命題が真理である必要はない、仮定であってもよい。ここでの〝公理〟とは、論証の必要がないほど自明な命題のことです。

私たちの身の回りで起きている自然界の現象は、数学の理論に沿って見えますが、そうであるなら、自然界の物質から構成された私たち人間も、抽象理論の中で生きていることになります。

そうすると、私たちには自由意思がないということになりますが、そうなのでしょうか。いえ、実は、あるのです。この疑問に答えてくれるのが、「カオス理論」です。

カオスとは「混沌・無秩序」の意味

カオスとは元々ギリシャ語で〝混沌〟〝無秩序〟などを意味する言葉で、神話などでも宇宙ができる以前の形のない状態をいう場合に使うそうです。

数学に出てくる数式のことですが、ある数を代入すれば、ただ一つの確定値が出てきます。その意味では決定論です。しかし、カオスの理論は、その決定論から予測不可能な結果を生み出すことがあるというのです。

今、y＝4x（1－x）という式にx＝0・75を代入すると、答えは0・75となります。次のこの値を再び右の式に入れても得られる値は同じ0・75で、事態は何も変わりま

せん。しかし、0．75を0．750001に変えると、答えは0．749998になるのです。

次にこの0．749998を新しいxとして最初の式に入れてみると、答えは、0．750004となり、これを何度も繰り返していくと、14回目までは0．75の周辺をさまよいますが、それを過ぎると、30回目までに、0．000256から0．999936までの範囲を不規則に変動します。0．75を0．000001だけかえたことが、予測不能の事態を引き起こしたのです。これがカオスです。

生活上の小さな軌道修正が大きく人生を変える

このことについて、エッセイの著者、北海道「美宙（みそら）」天文台名誉台長　佐治晴夫先生は、実は、私たちの人生も同じ、と言っています。「ほんの少しだけ軌道修正して努力を続けると、人生は変えられるということになるのです。これこそ自然界に内在するカオスが私たちにもたらしてくれる自由意思であり、数学が教えてくれる人生案内です」

素敵な比喩ですね。そこで思ったのですが、私たちも、日常の世界でほんの少しだけ変えることによって、いつの間にか大きく変えることができる、ということです。そのことは科学的にも説明できると考えていいのではないでしょうか。

決定論の中にひそむ自由意思の余地を言っ

ているこのお話は、私たちの日常の「ちょっとした姿勢の改善」＝〝自分建替え〟ということは長期的には難しい事とは限らない、ということの例えともなるということです。

〈参考文献〉

『決定論のなかにひそむ自由
（地下鉄エッセイ）』
佐治晴夫（理学博士）



ちょっといっぷく

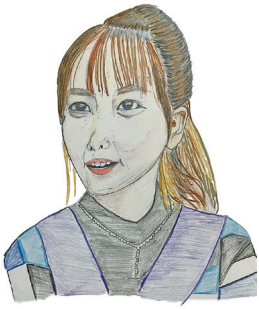
作者：福井の田治興一さん……似顔絵というより、ドラマやライブ等の感動場面の人物画を描いています。



①ドラマ教場の木村拓哉



②阿部一二三（柔道）



③ ikura（YOASOBI）



④ものまね芸人（ほいけんた）

①ドラマ「教場」での風間公親教官（木村拓哉）！刑事の頃、犯人にアイスピックで右眼を刺され義眼。教え子を目の前で襲撃され殉死させてしまう。警察学校の教官となり、二度と教え子を死なせないため、厳しく指導し、警察官に向かないものには、退校届を書かせる深い愛情を秘めた教官。

②パリオリンピック柔道の阿部一二三さんは、妹の詩が２回戦負けとなり、兄妹揃って金メダルの夢は絶たれたが、妹の分も頑張らねば！と気負い金メダルを獲得しました。

③ YOASOBI の IKURA さんです。

④さんまさんのモノマネ芸人“ほいけんた”さん。入れ歯を装着するとホント似てますね！

編集後記

◇新たな年の春を迎えて、この場に、一般の方々からの問い合わせや来訪があったそうです。

◇一般女性から「死にたい、という思いがわいてきます……」との電話。

◇インターネットを、「悩み事相談」で検索し「あたらしい道」が出てきたことがきっかけとのこと。

◇別の女性からは「大変な悩みを抱えている。どうしたらよいか分からない。お話を聞きたい……」

◇また、霊能関係と思しき人の、突然の訪問もあったそうです。

◇いずれも、当番や本部の担当者が誠意をもって対応しております。

◇二十分ほど話をした電話の女性は「何となく元気が出てきました」と言って受話器を置いたそうです。

◇最近、世相もだいぶ厳しくなって、通るに通れないときが来たのかと、身が引き締まる思いがします

◇また、一日研修では、若い男性が来られました。見た目にはいかにも現代っ子風でしたが、帰りがけには、「今までの考え方が、幅広い視野の考え方に広がった」との感想を述べられたそうです。

◇父親の大切さ、親孝行の大事さについても、改めて気づかされたとも。

◇将来を担う若人には日本のよさに気づいて、早く仕合わせになってほしいものです。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

（年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお願い致します）

申込先

あたらしい道本部

電話番号　0729（56）7971

FAX　0729（57）5100

季刊誌「あたらしい道」令和8年夏号（第547号）

初　版　令和8年6月8日

第二版　令和8年7月17日

発行責任者　中井　健

編集責任者　柳田　泰

発行所　一般財団法人　あたらしい道
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18
〒583-0872　TEL：0729（56）7971

印刷所　キクイ印刷工芸社
大阪府羽曳野市古市6-12-9
〒583-0852　TEL：0729（56）6881

季刊誌「あたらしい道」

令和八年夏号　第５４７号

（２０２６年）

発行／一般財団法人 あたらしい道